

千葉県八千代市

南海道遺跡 c 地点

— 宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

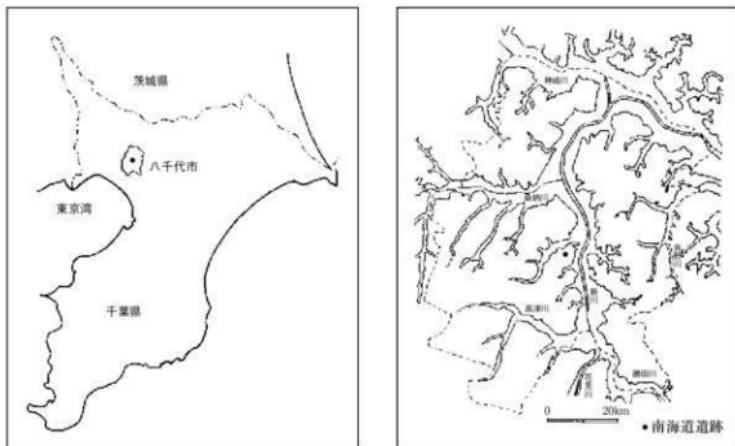
2019

関口幸男

八千代市教育委員会

千葉県八千代市
なんかいどう
南海道遺跡 c 地点

— 宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —



2019

関口幸男
八千代市教育委員会

凡　　例

- 本書は、八千代市萱田字西堀747番1に所在する南海道遺跡c地点の発掘調査報告書である。
- 発掘調査は、確認調査を国庫・県費補助事業として、本調査は、民間開発等埋蔵文化財調査事業として、事業者より調査協力金を納付いただき、八千代市教育委員会の委託事業として実施した。
- 発掘調査・本整理作業は以下のとおりである。

[調査] 確認調査　期間 平成30年5月15日～5月21日 面積64m²/574m² 担当 宮下 聰史
本調査　期間 平成30年7月24日～8月30日 面積308.5m² 担当 宮澤 久史
調査補助員 伊藤衣莉加・桐原誠・小弓場直子・高木秀夫・萩原雄一・橋本喜正・原田雪子
田中直子・玉井庸弘・山田俊二

[整理] 図版作成　期間 平成30年12月3日～平成31年1月28日 担当 森 竜哉
整理補助員 伊藤衣莉加・内田紀子・八幡奈緒子・柴田清加

- 本書の編集・執筆は、森がおこなった。
- 現場の遺構、遺物写真は宮澤が、報告書掲載の遺物写真は森が撮影した。
- 本書の作成・刊行については、整理補助員と森が協力して行い、森が統括した。
- 出土遺物、実測図等の資料は、八千代市教育委員会が保管している。
- 本書の遺構番号は、発掘調査時の番号を使用している。
- 遺構・遺物の縮尺は、下記のとおり統一しているが、位置図・全体図等は別記した。
〔遺構〕堅穴建物跡(D)、掘立柱建物跡(H) 1/80・カマド、炉跡 1/30・ピット(P) 1/30
〔遺物〕縄文土器1/3、尖頭器2/3、土師器・須恵器1/4、鉄器軽石1/2、土玉石製模造品1/1
- 遺物実測図の中軸線サイドの空きは、復元実測を示す。
- 遺物実測図の実測番号脇の数字は、床面からの高さを表す。(cm)
- 遺構・遺物のスクリーントーンは下記のとおり統一した。
■ 燃土・赤彩 ■■■■■ カマド袖・粘土・須恵器・黒色処理
- 本書使用の地形図は下記のとおりである。
第1図 八千代市発行 1/25,000八千代都市計画基本図
第2図 八千代市発行 1/2,500八千代都市計画基本図
- 発掘調査から整理作業において下記の諸氏・機関にご指導、ご協力いただきました。記して感謝いたします。(敬称略) 関口幸男 玉井庸弘 千葉県教育庁文化財課

本文目次

第1章 序説	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と経過	1
第2章 周辺と南海道遺跡のこれまでの調査成果について	1
第3章 検出された遺構と遺物	
第1節 縄文時代	3
第2節 古墳・奈良時代	4
第3節 ピット・O1H	11
第4章 まとめ	
縄文時代・弥生時代・古墳時代・奈良時代	15

挿図目次

第1図 周辺の遺跡	1
第2図 南海道遺跡調査区	1
第3図 南海道遺跡c地点遺構配置図	2
第4図 縄文時代遺構実測図・出土遺物	3
第5図 遺構外出土縄文土器	3
第6図 O1D遺構実測図・出土遺物	5
第7図 O2D遺構実測図・出土遺物	6
第8図 O3D遺構実測図	8
第9図 O3D出土遺物(1)	9
第10図 O3D出土遺物(2)	10
第11図 O4D遺構実測図・出土遺物	11
第12図 ピット遺構実測図(1)	13
第13図 ピット遺構実測図(2)	14
第14図 O1H遺構実測図	14

図版目次

図版1 遺構 [遺跡全景・O1D～O3D]	図版3 遺物 [O3D(1)]
図版2 遺構 [ピット]・遺物 [O1D・O2D]	図版4 遺物 [O3D(2)・O4D・ピット・遺構外縄文土器]

第1章 序 説

第1節 調査に至る経緯

平成30年3月、岡口 幸男 氏（以下事業者という）から、宅地造成を予定する旨で「埋蔵文化財の取扱いについて（確認）」の文書が八千代市教育委員会に提出された。確認地は、市道跡No218南海道遺跡の範囲内であり、土器の散布もみられることから、文化財保護法第93条の届出が必要な旨回答した。届出を受けて、協議の結果、確認調査を実施することとなり、生産緑地解除後の同年5月に確認調査を実施した。その結果、古墳時代・奈良平安時代の堅穴建物跡3棟等が検出され、その後の協議により記録保存の措置をとることとなり、委託契約書の締結等諸準備が整った平成30年7月本調査に着手した。

第2節 調査の方法と経過

調査期間は7月24日～8月30日で、7月24日～26日重機による表土剥ぎ、26日遣構プラン確定後、同日から堅穴建物跡等遣構調査に移行した。トータルステーションによる3cm程度以上の土器片を基準とした遣物取り上げ及び平面図作成を並行して行い、進捗状況を考慮しつつ、土坑・カマド・炉等の調査を行った。個別遣構調査終了後に全体写真撮影を行い調査を完了とした。

第3節 周辺遺跡と南海道遺跡のこれまでの調査成果について（第1図・2図）

本遺跡の西隣接地は、現ゆりのき台地区で、区画整理事業に先行して発掘調査が実施された。旧石器



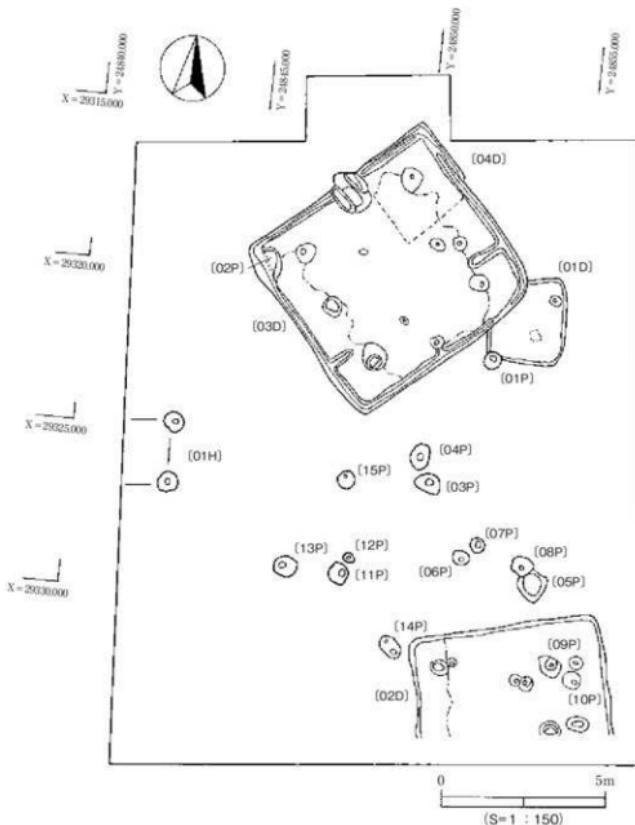
第1図 周辺の遺跡 (S = 1 : 25,000)



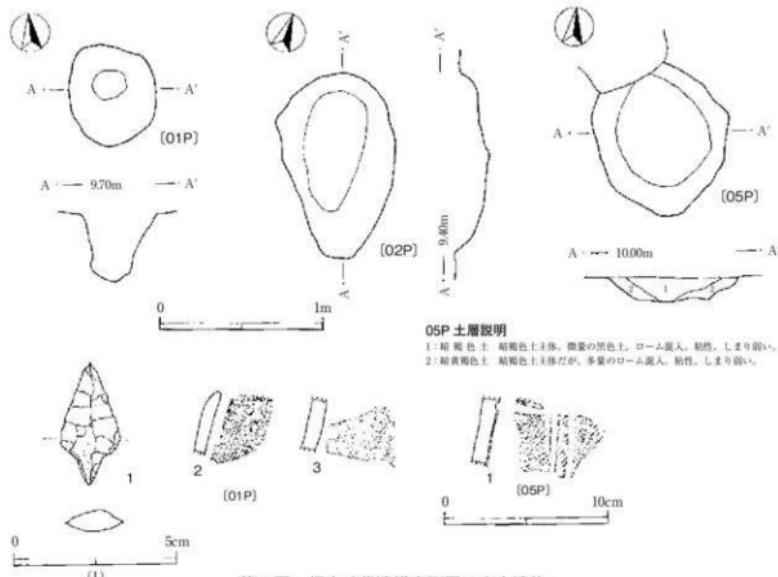
第2図 南海道遺跡調査区 (S = 1 : 5,000)

時代から中世に至る各時代の遺構・遺物が発見され、特に旧石器時代各層の石器類の発見と奈良平安時代の集落にかかる遺構・遺物については特筆される成果を上げている。調査された6遺跡から、萱田遺跡群と呼称されている。南海道遺跡は、萱田遺跡群中の北海道遺跡に隣接し、地形上からも同一遺跡とみて差し支えない。北海道遺跡では、弥生時代後期・古墳時代中後期・奈良時代後半～平安時代前期の各期において堅穴建物跡を中心に発見されている。

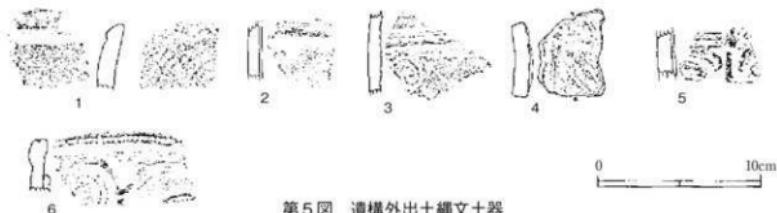
南海道遺跡については、これまでに2地点の確認調査が行われている。a地点においては、遺構は古墳時代後期の堅穴住居跡1軒、古墳時代土坑1基で、遺物は縄文時代前期土器片、平安時代須恵器窯片等が出土している。b地点では、遺構は古墳時代後期の土坑1基、遺物は古墳時代後期土師器片のほか黒曜石剥片が出土している。



第3図 南海道遺跡C地点遺構配置図



第4図 繩文時代遺構実測図・出土遺物



第5図 遺構外出土縄文土器

第2章 検出された遺構と遺物

第1節 縄文時代

今回の野外調査では縄文時代の土坑3基を検出した。また、整理作業による出土遺物の分類・接合の過程で、縄文時代中期初頭から前半の土器片等を抽出した。以下に報告する。

01P (第4図・図版2)

位置：調査区北東01Dと重複。確認面：Ⅲ層上面。長輪方位：なし。規模・平面形： $0.53\text{m} \times 0.52\text{m}$ ×深さ0.42mの円形。壁：底面より角度をもって立ち上がる。底面：平坦面見られず。覆土：暗褐色土系の自然堆積。遺物：壁面上層より1の有茎石錐と2.3の無文縄文前期土器2点が出土。1はチャートで、長3.7cm、幅1.8cm、重3g。備考：出土遺物から縄文前期のピットである。

02P (第4図・図版2)

位置：調査区北西03Dと重複。確認面：Ⅲ層上面。長軸方位：N-24°-W 規模・平面形：1.14m×0.7m×深さ0.43mの楕円形。壁：底面より角度をもって立ち上がる。底面：若干の凹凸あり。覆土：暗褐色土系の人が堆積。遺物：なし。備考：03Dに切られ、覆土の縁より具合から縄文時代の土坑である。

05P (第4図)

位置：調査区南東08Pと重複。確認面：Ⅲ層上面。長軸方位：なし。規模・平面形：0.9m×0.8m×深さ0.19mの円形。壁：底面より角度をもって立ち上がる。底面：平坦である。覆土：暗褐色土系の自然堆積。遺物：覆土中より1の中期五領ヶ台式土器片が出土。備考：出土遺物から縄文中期のピットである。

遺構外出土の縄文土器 (第5図・図版4)

1は前期末葉の口縁部で、内面に緩い条。2～6は中期で、2.3は五領ヶ台式、2は隆帶+連続爪形文、3は三角印刻文+細線文、4は五領ヶ台II式の土器片錐で5.1×3.7cm、重25g、5は五領ヶ台II～阿玉台Ia式併行期で隆帶文が入組んでいる。6は阿玉台Ia式の口縁部で、1列の角押文+隆帶。

第2節 古墳・奈良時代

今回の調査においては堅穴建物跡4棟を検出した。内訳は古墳時代中期2棟、同後期1棟、奈良時代1棟である。なお、ピット・掘立柱建物跡については、第3節として扱った。以下報告する。

01D (第6図・図版1.2)

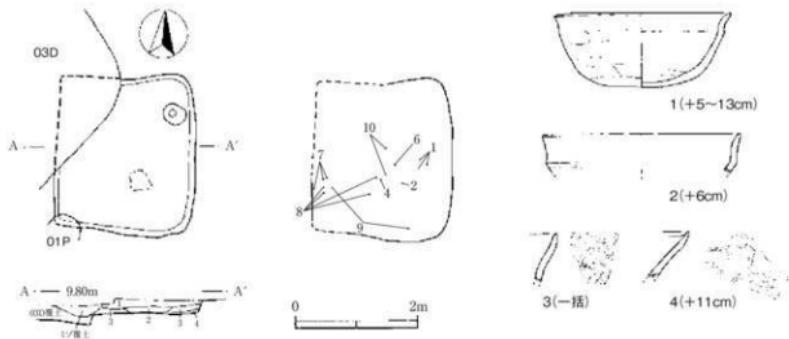
位置：調査区北東。確認面：Ⅲ層上面。主軸方位：ほぼ南北方向。重複関係：03Dに切られる。規模・平面形：2.6m×2.3m×深さ0.25mの隅丸方形。壁：床面から角度をもって立ち上がる。床面：ソフトローム中の地床で、中央南側に硬化面がみられる。ピット：北東隅に40cm円形、深さ13cmのピット1基。覆土：4層の自然堆積層である。遺物出土状態：トータルステーションで113点出土している。床面に近い高さからの出土が主体。掲載遺物はほぼ床面出土である。備考：遺物から古墳時代中期の遺構に想定される。

02D (第7図・図版1.2)

位置：調査区南東隅。確認面：Ⅲ層上面。主軸方位：炉を奥としてほぼ東西方向である。重複関係：なし。規模・平面形：5.75m×3.7m以上×深さ0.25mの方形（推定）。壁：床面からほぼ垂直に立ち上がる。床面：ソフトローム中の地床である。西壁側を除いて、硬化面が全体に見られる。炉：建物中央東壁際際に作られる。75×40cm、深さ12cmの楕円形で、底面が少し焼けている。ピット：炉とは別に、不規則な配置で6基遺存する。深さは13～37cmと浅く柱掘方ではない。覆土：5層に分層。暗褐色土系の自然堆積層である。また、床面に近い高さから焼土・粘土が検出されている。遺物出土状態：トータルステーションで260点出土しているが、覆土中からの出土が多い。北壁東側にやや集中している。出土遺物には時間差は見られない。備考：遺物から古墳時代中期の遺構に想定される。

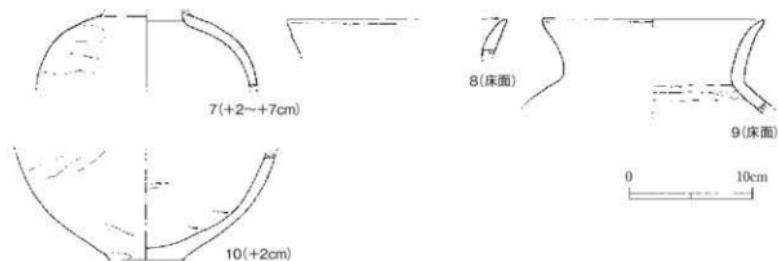
03D (第8～10図・図版1.3.4)

位置：調査区北側。確認面：Ⅲ層上面。主軸方位：N-35°-Wで西に振られている。重複関係：02P、01Dを切り、04Dに切られる。規模・平面形：6.75m×6.25m×深さ0.32mでやや東西に長い方形。壁：周溝から角度をもって立ち上がる。周溝：全周する。南壁側で東西で対となる位置に間仕切り溝が作られる。周溝・間仕切り溝ともに幅20cm、深さ15cm程度である。床面：ハードローム中の地床である。各柱穴を結んだ内側に硬化面がみられる。カマド：北壁ほぼ中央に壁を掘り込んで作られる。焚口部は、袖前面に若干張り出す。掘り込みは35cm程度であるが、カマド土層10は埋戻し層か。焚口部中央から奥部に火床部がある。カマド土層8が該当する。煙道立ち上がりは火床部最奥部から角度をもつ



O1D 土層説明

- 1: 暗褐色土、黒色土上にローム粒少含む。しまりあり。
- 2: 暗褐色土、黒色土、ローム粒混合層。しまりあり。
- 3: 黒色土、ローム、黒色土混合層。ローム粒多い。しまりあり。
- 4: 黒色土、ロームを主にロームブロックが混入。しまりあり。



第6図 O1D遺構実測図・出土遺物

O1D遺物観察表 (第6図・写真図版2)

器種	部位	計測値 (cm)			色調	胎土	調整・文様等
		高さ	口径	底径			
1 土師器 环	はげ光形 口縁部一部欠	6.1	14.4	-	橙褐色	長石、石英、雲母 白色粒	口縁部横なで。体部内外面ヘラ削り後なで。
2 土師器 环	口縁部1/3	3.2	16.0	-	赤褐色(赤彩)	長石、白色粒 雲母	口縁部横なで。体部外面ヘラ削り。
3 土師器 環	口縁部片	-	-	-	内外面赤褐色(赤彩)	雲母、白色粒	外外面なで。
4 土師器 环	口縁部1/8	-	-	-	内外面赤褐色 一部黒斑	雲母、赤色粒 石英、白色粒	内面なで。外外面横位ヘラ削り後なで。
5 土師器 壺	口縁部片	-	-	-	外表面褐色 内面茶褐色	赤色粒、石英	外外面なで。
6 土師器 壺	口縁部片	-	-	-	内外面橙褐色	雲母、長石	口縁部横なで。体部外外面なで。
7 土師器 壺	頸部-胴部	5.9	頸部径 6.0	-	外表面淡茶褐色 内面暗褐色	雲母、石英、長石	外表面横位ヘラ削り。内面なで。
8 土師器 壺	口縁部1/3	3.0	18.0	-	茶褐色 一部黒斑	雲母、長石、赤色粒	口縁部横なで。
9 土師器 壺	口縁-頸部全周	7.7	18.2	-	茶褐色 淡茶褐色	白色粒 雲母、長石	口縁部横なで。 頸部-胴部外外面ヘラなで。
10 土師器 壺	底部2/3、 胴部1/3	8.8	-	6.0	暗茶褐色	雲母 赤色粒、白色粒	外表面ヘラ削り後なで。内面ヘラなで。



第7図 O2D遺構実測図・出土遺物

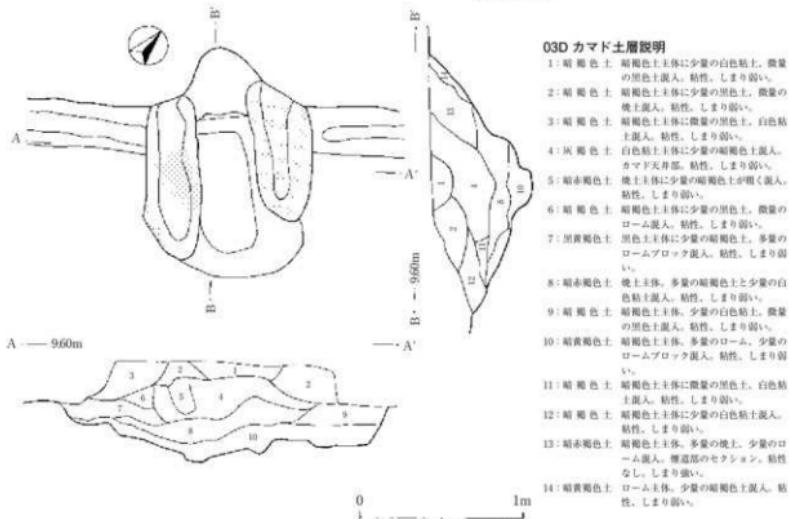
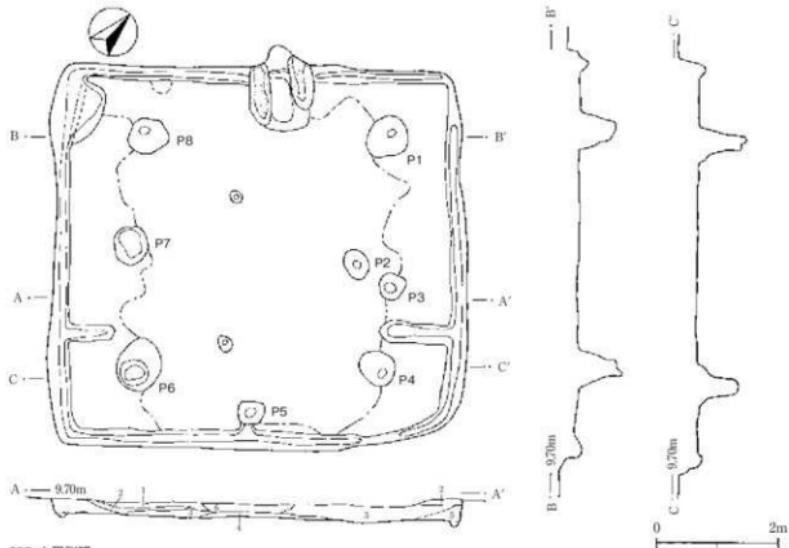
O2D遺物観察表 (第7図・写真図版2)

器種	部位	計測値 (cm)			色調	胎土	調整・文様等
		器高	口径	底径			
1 土師器 环	口縁部分	-	-	-	内外面淡橙褐色 白色粒、雲母	白石英	口縁部横なで。体部外面ヘラ削り後などで、内面なで。
2 土師器 环	口縁部分	-	-	-	外面茶褐色一部黒澤 内面淡橙褐色	長石、雲母	口縁部横なで。体部外面ヘラ削り後などで、内面なで。
3 土師器 环	口縁部分	-	-	-	赤褐色(内外面少彩)	雲母	口縁部横なで。体部外面ヘラ削り後などで、内面なで。
4 土師器 环	口縁部分	-	-	-	外面茶褐色煤付着 内面淡橙褐色	黑色粒、雲母	口縁部横なで。 体部外面横位ヘラ削り後などで。内面なで。
5 土師器 环	口縁部分	-	-	-	内外面淡橙褐色	雲母、黑色粒	口縁部横なで。体部内外面なで。
6 土師器 环	口縁部～ 体部 1/5	遺存高 4.4	15.0	-	内外面橙褐色	長石、黑色粒	口縁部横なで。体部外面横位ヘラ削り。内面なで。
7 土師器 环	口縁部	-	-	-	内外面茶褐色	雲母、長石	口縁部横なで。体部外面横位ヘラ削り。内面なで。
8 小型壺	頸部 1/3	遺存高 2.9	頸部径 8.0	-	内外面赤褐色～ 茶褐色(水彩)	白色粒、赤色粒	内外面なで。
9 土師器 壺	口縫～頸部 1/5	-	-	-	内外面茶褐色	白色粒、雲母	口縁部横なで。胴部外面ヘラなで。内面なで。
10 土師器 壺	口縫～頸部 1/6	-	-	-	内外面茶褐色	長石、赤色粒 白石英	口縫部横なで。胴部内面ヘラなで。 口唇部内面にすれ跡明瞭。

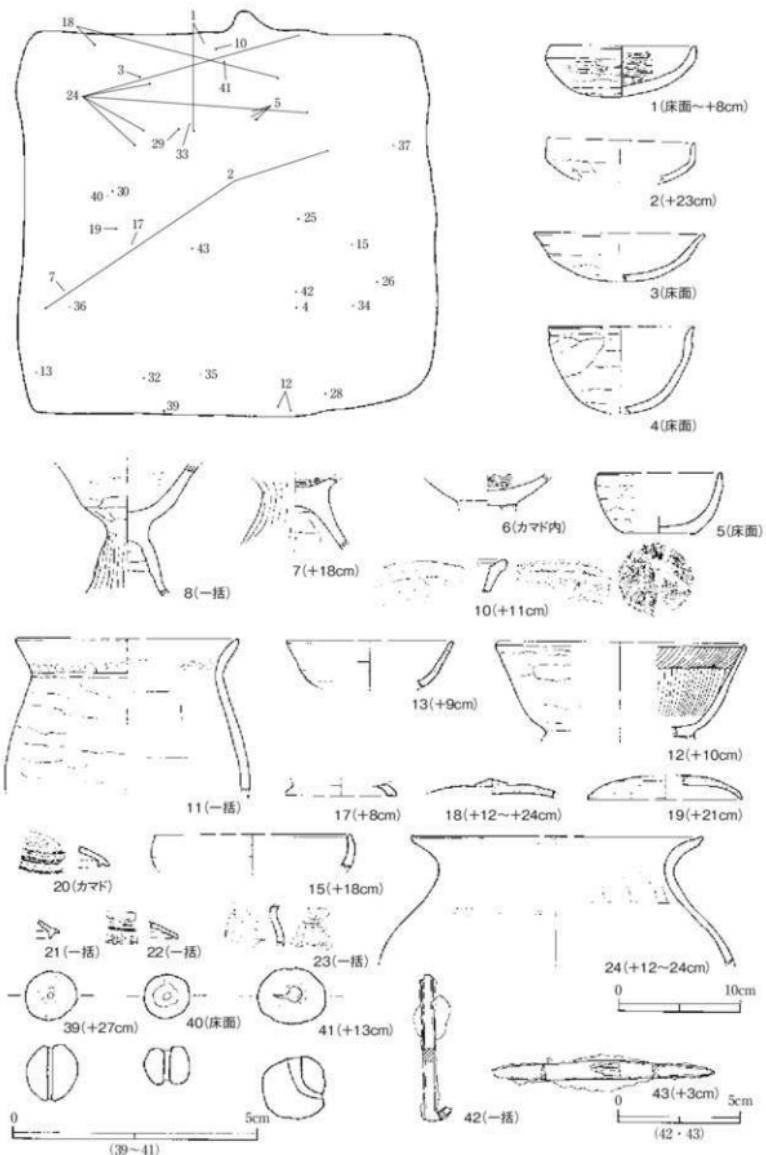
て一旦立ち上がり、そのあと角度を緩やかに変えて煙道端部に至る。煙道の切れ込みはU字形である。袖部の遺存は悪い。カマド土層4がカマド天井部である。ピット:P5が入口ピットで45cm×40cm×深さ35cmの円形で、P14.6.8が主柱穴で深さ60~80cmの掘り込みである。P2.3.7は主柱穴軸上に位置しており、柱構成ピットで、深さは15~30cmである。覆土:6層に分層。黒色土から暗褐色土主体のおおむね自然堆積層である。遺物出土状態:トータルステーションで374点出土している。床面及び床面から若干浮いた高さの出土がみられる。掲載遺物は04Dとの重複があり、遺物No12.13.15.17~24は04Dに帰属する。石製模造品が出土しているが、他の遺構から出土がみられないため、本遺構に帰属するものである。備考:遺物から古墳時代後期の遺構に想定される。

03D遺物観察表(第9.10図・写真図版3.4)

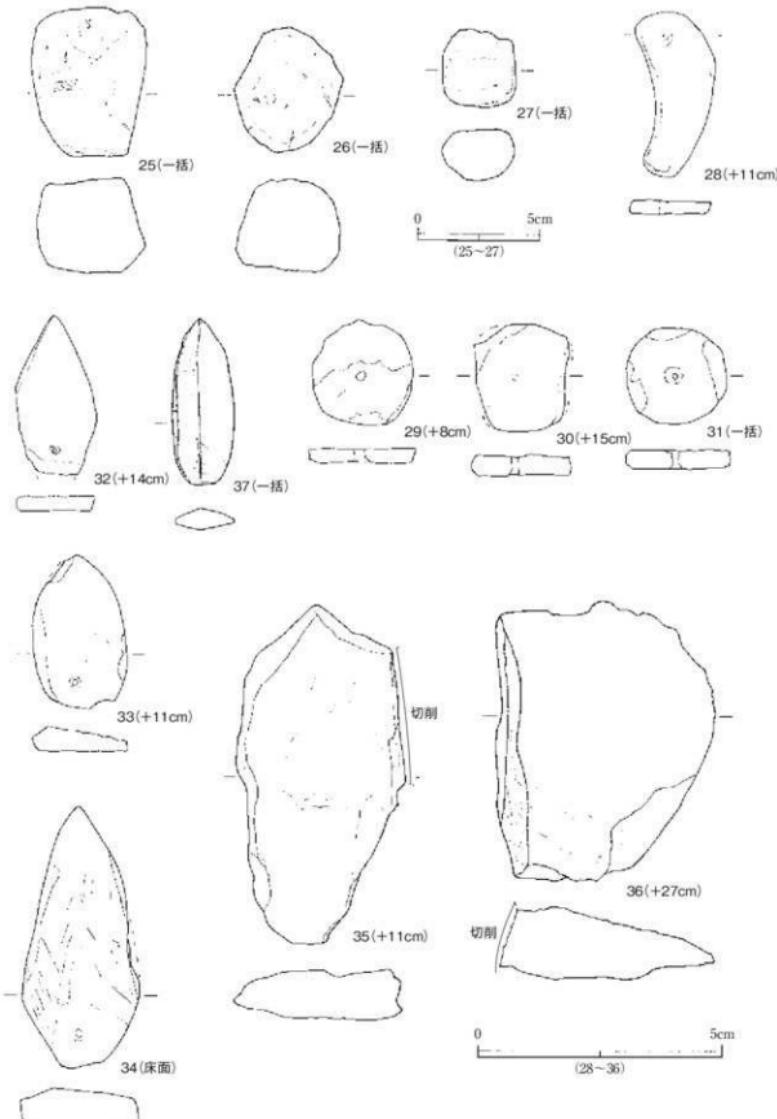
器種	部位	計測値(cm)			色調	胎土	調整・文様等
		高さ	口径	底径			
1 土師器 小鉢	口縁部1/2欠	4.1	12.0	-	内外面暗褐色	白色粘、素面	底部外側へクレ割り後なで。部分的ヘラ削き。
2 土師器 杯	口縁部~体部1/5	3.3	12.2	-	外表面黒褐色 内面暗褐色	白色粘、素面	口縁部沿線なで。外側外表面へクレ削り。内面なで。
3 土師器 杯	口縁部~体部1/5	3.9	14.0	-	内外面暗褐色	白色粘、黑色粘 砂粒	口縁部沿線なで。体部外側へクレ削り後なで。内面なで。有段口縫合。
4 瓢	口縁部~底面1/4	7.1	12.0	-	淡橙褐色 内外面一部黒褐色	長石、雲母 白色粘	口縁部横なで。体部外側部へ斜位へクレ削り。内面なで。
5 土師器 小鉢	口縁部~体部1/6	5.0	10.0	6.4	内外面暗褐色	白色粘、素面	口縁部横なで。底部外表面紫痕。
6 土師器 杯	坏部~脚部全周	遺存高 2.6	脚部径 4.6	-	内外面暗褐色	白色粘、素面 赤褐色	外側なで。内面へクレ削き。(難かい)。作付上げ処理か。
7 土師器 杯	脚部~坏部全周	遺存高 5.5	脚部径 5.5	-	淡橙色~暗茶褐色	白色粘、素面 灰青	坏部外表面細かなヘラ削り後なで。脚部外表面へクレ削り。内面へクレ削り。
8 土師器 杯	脚部全周 坏部1/4	遺存高 10.7	脚部径 3.4	-	暗茶褐色	白色粘、長石 素面、赤褐色	脚部外表面へクレ削り後なで。内面へクレ削り。
10 土師器 杯	口縁部1/5	-	-	-	淡赤褐色	長石、白色粘 雲母	なで整形。口縁部内面に明瞭な棱。
11 土師器	口縁部1/6~胴部	12.5	18.0	-	淡橙褐色~暗褐色	素面、石英、鈎鉢 白色粘、砂粒	口縁部内斜面黄褐色状なで。横なで。内面へクレ削り。
12 土師器 高台付杯	口縁部~高台1/4	7.8	20.0	-	内外面暗褐色	白色粘	外側へクレ削り後なで。口縁部内面に浅擦。内面へクレ削り。蓋入品。
13 頭蓋器 杯	口縁部1/6	3.8	13.4	-	内外面灰白色	白色粘、白色粘 砂粒	ロクロ成形。
15 頭蓋器 杯	口縁部	2.8	16.0	-	暗青灰褐色	白色粘、石英	ロクロ成形。口縁部内面にぎ状。
17 頭蓋器 瓶底	高台部1/2	1.1	9.0	-	灰白色	も密	ロクロ成形。貼付け高台。
18 頭蓋器 瓶	天井部	1.5	つまり 2.5	-	淡青灰褐色	白色粘密	ロクロ成形。天井部絞軸へクレ削り。
19 頭蓋器 蓋	口縁部~体部1/4	1.9	12.6	-	淡青灰褐色	白色粘、長石密	ロクロ成形。天井部絞軸へクレ削り。
20 頭蓋器 蓋	末端部	-	-	-	淡青灰褐色	白石粘密	ロクロ成形。内面明瞭な棱。
21 頭蓋器 蓋	末端部	-	-	-	青灰褐色	長石密	ロクロ成形。内面立ち上がる明瞭な棱。
22 頭蓋器 蓋	末端部	-	-	-	淡黄灰褐色	素面多合	ロクロ成形。外表面回転へクレ削り。内面細い棱。
23 頭蓋器 頭部	頭部~体部	-	-	-	灰褐色	白石粘	外表面旋びき印目文。内面へクレ削り。
24 土器	口縁部~体部1/4	10.2	23.5	-	淡橙褐色	長石多く 雲母	口縁部のみあわせ。制御外表面へクレ削り後なで。内面へクレ削り。
25 石製品 鉛石	完形	長 6.1	幅 4.7	厚さ 3.8	重さ 31g	重さ	8此において平坦面見られる。上面中央に刃物痕。
26 石製品 鉛石	完形	長 5.0	幅 4.4	厚さ 3.2	重さ 22g	重さ	下面に1cm程度の刃物痕2ヶ所あり。
27 石製品	完形	長 3.2	幅 3.0	厚さ 2.0	重さ 6g	重さ	下面は平頭面見られる。
28 石製模造品	完形	長 3.4	幅 1.7	厚さ 0.3	重さ	成形品	孔径1.8mm。穿孔部上端22mm。両面・側面研磨。
29 石製模造品	完形 有孔円板	長 2.2	幅 2.1	厚さ 0.3	重さ 2g	成形品	孔径21mm。穿孔部上端41mm。両面・側面研磨。
30 石製模造品	有孔円板	長 2.2	幅 2.0	厚さ 0.4	重さ 3g	成形品	孔径1.8mm。穿孔部上端25mm。両面・側面研磨。
31 石製模造品	完形 有孔円板	長 2.0	幅 2.0	厚さ 0.4	重さ 3g	成形品	孔径1.2mm。穿孔部上端31mm。両面・側面研磨。
32 石製模造品	基部一部欠	長 2.3	幅 1.8	厚さ 0.3	重さ 2g	成形品	孔径1.5mm。穿孔部上端18mm。両面・側面研磨。
33 石製模造品	先端部一部欠	長 3.1	幅 2.0	厚さ 0.5	重さ 4g	成形品	孔径1.7mm。両面・側面研磨。
34 石製模造品	完形	長 5.4	幅 2.5	厚さ 0.7	重さ 13g	成形品	孔径1.4mm。穿孔部上端23mm。両面・側面研磨。
35 石製模造品	完形 木材	長 6.9	幅 3.4	厚さ 1.1	重さ 29g	木材形側面研磨。	石表面切削による整形。
36 石製模造品	完形 木材	長 5.7	幅 4.5	厚さ 1.5	重さ 46g	勾玉形側面研磨。	勾玉形側面研磨。
37 石製模造品	完形 樹脂形	長 3.5	幅 1.3	厚さ 0.5	重さ 2g	木製品	穿孔なし。
						樹脂	両面・側面研磨。



第8図 03D遺構実測図



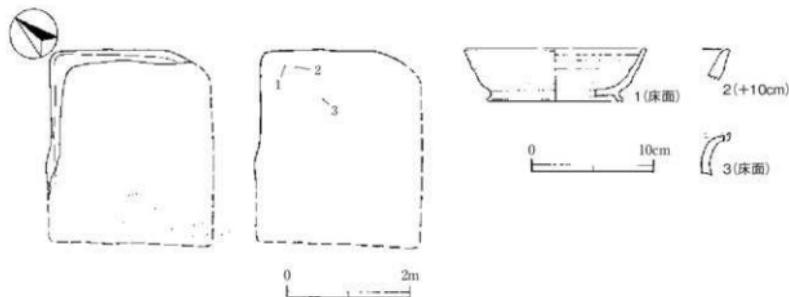
第9図 O3D出土遺物 (1)



第10図 O 3 D出土遺物 (2)

03D遺物観察表（第9.10図・写真図版3.4）

器種	部位	計測値(cm)			色調	胎土	調整・文様等
		器高	口径	底径			
39 土製品 土瓦	完形	長 1.1	幅 1.1	重さ 1g	淡褐色		なで整形。
40 土製品 土瓦	完形	長 1.0	幅 0.9	重さ 1g	漆黒色		なで整形。 上に空孔周縁面取り。
41 土製品 土瓦	完形	長 1.1	幅 1.1	重さ 2g	淡赤褐色		なで整形。 上に空孔周縁面取り。
42 土製品 切輪	一部	遺存長 6.0	幅 0.5	重さ 5g			切輪下端基部遺存。断面四角形。
43 土製品 刀子	一部	遺存長 9.0	幅 0.8	重さ 11g			鋸化が著しく遺存悪い。木質部中央に遺存。



第11図 04D遺構実測図・出土遺物

04D遺物観察表（第11図・写真図版4）

器種	部位	計測値(cm)			色調	胎土	調整・文様等
		器高	口径	底径			
1 頸部器 高台付片	口縁部~ 底辺1/4	4.3	14.8	11.2	淡青灰色	ち密	ロクロ成形。内外面ロクロなで。
2 土器器 瓦	口縁部片	-	-	-	暗褐色	白色粒、雲母	ロクロ部横なで。
3 土器器 瓦	口縁部片	-	-	-	淡褐色	雲母、石英	常陸型窓。

04D（第11図・図版4）

位置：調査区北側。確認面：Ⅲ層上面。主軸方位：N-64°-E方向。規模・平面形：32m（想定）×2.7m（想定）×深さ0.27mの長方形。壁のみの検出で、大半が03D覆土中に含まれていたため詳細は不明である。遺物の時期差と粘土範囲から規模を想定した。壁：東壁、北壁の一部分のみ遺存。床面：部分的検出で不詳。カマド：粘土範囲からの想定で隅カマドか。遺物出土状況：トータルステーションで13点出土。備考：遺物から奈良時代初頭の遺構に想定される。

第3節 ピット・01H

ピット12基、掘立柱建物跡1棟分を検出した。遺構に伴う明確な出土状況を示す遺物はないが、覆土の状況から判断し、奈良平安時代に属すると考える。なお、確認面は全てソフトローム上面である。

03P（第12図）

位置：調査区中央。方位：無。規模・平面形：0.77m×0.64m×深さ0.52mの不整円形。底面：丸底形状。覆土：6層。暗褐色土系の自然堆積層。所見：用途不明。

04P（第12図）

位置：調査区中央で03Pに隣接。方位：無。規模・平面形：0.7m×0.59m×深さ0.54mの円形。底面：丸底形状。覆土：3層。暗褐色土系の自然堆積。所見：明確な掘り込みを持つが、用途不明。

06P (第12図)

位置：調査区中央やや南側。07P隣接。方位：無。規模・平面形：0.65m × 0.48m × 深さ0.39mの円形。
底面：平坦。覆土：3層。暗褐色土系の自然堆積。所見：明確な掘り込みを持つ。用途不明。

07P (第12図)

位置：調査区中央やや南側。06P隣接。方位：無。規模・平面形：0.44m × 0.42m × 深さ0.52mの円形。
底面：丸底形状。覆土：4層。全体に縮りなく埋戻しか。所見：明確な掘り込みを持つ。用途不明。

08P (第12図)

位置：調査区中央やや南側。05Pを切る。方位：無。規模・平面形：0.61m × 0.57m × 深さ0.52mの円形。
底面：丸底形状。覆土：6層。暗褐色土系の埋戻しか。所見：明確な掘り込みを持つ。用途不明。

09P (第12図)

位置：調査区南側。02Dを切る。方位：無。規模・平面形：0.64m × 0.52m × 深さ0.73mの円形。底面：
丸底形状。覆土：5層。全体に縮りないが、掘立柱建物掘方の土層に近似する。所見：掘立柱建物掘
方と考えるが、方位、規模について不明である。

10P (第12図)

位置：調査区南側。02Dを切る。方位：無。規模・平面形：0.6m × 0.54m × 深さ0.5mの円形。底面：
丸底形状。覆土：3層。黒褐色土系の自然堆積層。所見：明確な掘り込みを持つが、用途不明。

11P (第13図)

位置：調査区中央やや南側。12P隣接。方位：無。規模・平面形：0.62m × 0.55m × 深さ0.61mの円形。
底面：偏って掘られる。覆土：4層。全体に縮りないが、人為堆積層か。所見：掘立柱建物掘方の堆
積を示すと考えるが、方位、規模について不明である。

12P (第13図)

位置：調査区中央やや南側。11P隣接。方位：無。規模・平面形：0.32m × 0.29m × 深さ0.34mの円形。
底面：丸底形状。覆土：3層。人為堆積層か。所見：用途不明。

13P (第13図)

位置：調査区中央やや南側。方位：無。規模・平面形：0.64m × 深さ0.43mの円形。底面：やや凹
がある平坦面。覆土：4層。暗褐色土系の自然堆積。所見：明確な掘り込みを持つが、用途不明。

14P (第13図・図版2)

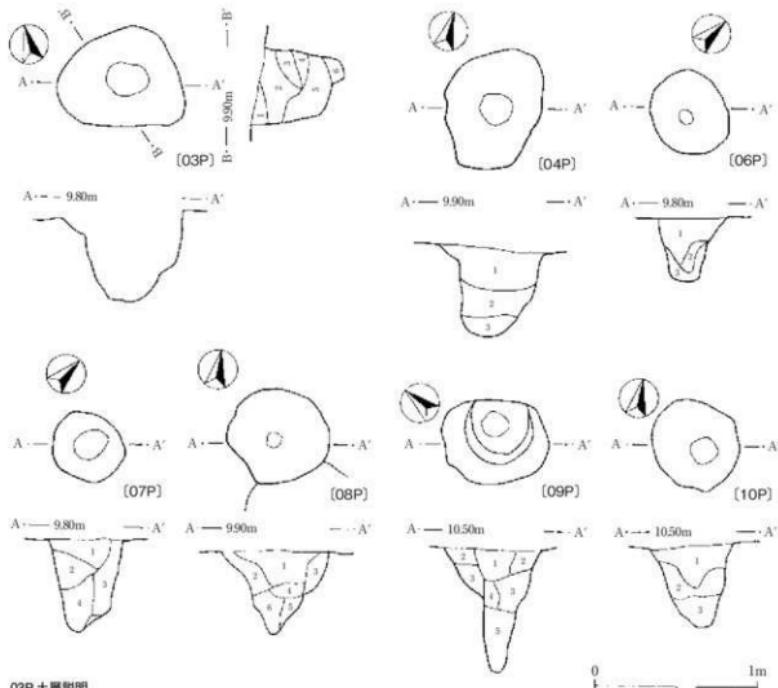
位置：調査区南側。02Dに隣接。長軸方位：N-32° - W。規模・平面形：0.72m × 0.49m × 深さ0.49m
の楕円形。底面：ほぼ平坦。覆土：4層。埋まり方から人為堆積層か。所見：明確な掘り込みを持
つが、用途不明。

15P (第13図)

位置：調査区中央。方位：なし。規模・平面形：0.7m × 0.6m × 深さ0.6mの円形。底面：丸底形状。
覆土：5層。暗褐色土系の自然堆積。所見：明確な掘り込みを持つが、用途不明。

01H (第14図)

位置：調査区中央西際。長軸方位：東西方向で、西は調査区外。規模：梁行1.4m × 衍行1.4m以上 ×
掘方の深さ0.7m。掘方は0.45mの円形。覆土：2口の内1口で、掘立柱建物の柱立ち腐れ状況を確認
している。所見：東西方向の掘立柱建物跡と想定した。



03P 土層説明

- 1:暗褐色土上 ローム主体に少量の暗褐色土混入。粘性弱い。しまりややあり。
- 2:暗褐色土上 暗褐色土主体に少量の黒色土。幾量のローム混入。粘性。しまり弱い。
- 3:暗褐色土上 暗褐色土主体に少量の黒色土。ローム混入。粘性。しまり弱い。
- 4:暗褐色土 黒色土主体に少量の暗褐色土。少量のローム混入。粘性。しまり弱い。
- 5:暗褐色土 ローム主体に少量の暗褐色土。少量の黒色土混入。粘性。しまり弱い。
- 6:暗褐色土 ローム主体に少量の黒色土が粗く混入。粘性。しまり弱い。

04P 土層説明

- 1:暗褐色土上 暗褐色土主体に微量の黒色土混入。粘性弱い。しまりややあり。
- 2:暗褐色土上 黑色土主体に微量の暗褐色土。少量のローム混入。粘性。しまり弱い。
- 3:暗褐色土上 暗褐色土主体に微量の暗褐色土。ローム混入。粘性。しまり弱い。
- 4:暗褐色土上 暗褐色土主体に微量の黒色土。ローム混入。粘性。しまり弱い。
- 5:暗褐色土上 暗褐色土主体に微量の黒色土。ローム混入。粘性。しまり弱い。

06P 土層説明

- 1:暗褐色土上 暗褐色土主体に少量の黒色土。微量のローム混入。粘性。しまり弱い。
- 2:暗褐色土上 暗褐色土主体。微量のローム、少量の黒色土。ローム混入。粘性。しまり弱い。
- 3:暗褐色土上 暗褐色土。ローム混合。粘性。しまり弱い。
- 4:暗褐色土上 暗褐色土主体に少量の黒色土。ローム混入。粘性。しまり弱い。
- 5:暗褐色土上 暗褐色土主体に微量のローム、微量の黒色土混入。粘性。しまり弱い。
- 6:暗褐色土上 暗褐色土主体。多量の黒色土混入。粘性。しまり弱い。

07P 土層説明

- 1:暗褐色土上 黑色土主体。少量の暗褐色土と微量のローム混入。粘性。しまり弱い。
- 2:暗褐色土上 暗褐色土主体。少量の黒色土。ローム混入。粘性。しまり弱い。
- 3:暗褐色土上 黑色土主体に微量の暗褐色土。ローム混入。粘性。しまり非常に弱い。

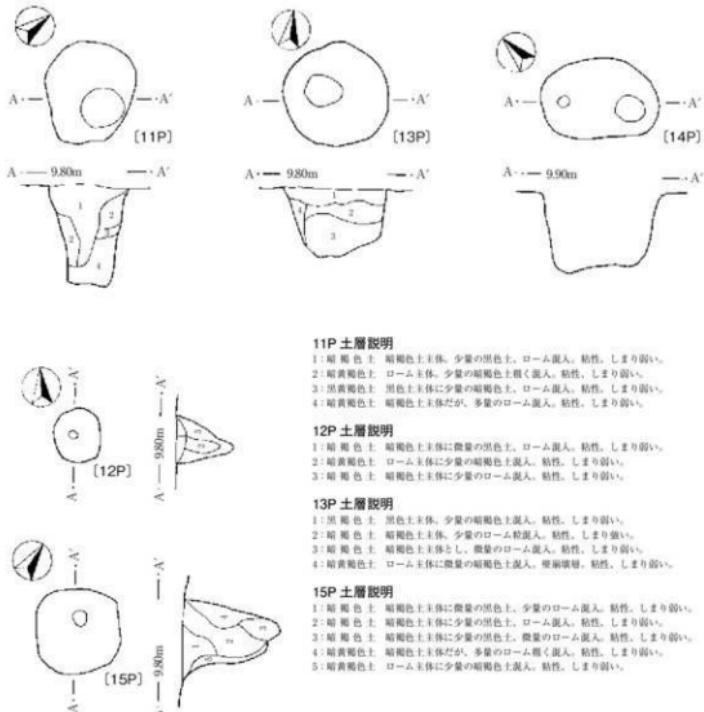
08P 土層説明

- 1:暗褐色土上 暗褐色土主体に微量のローム混入。黑色土混入。粘性。しまり弱い。
- 2:暗褐色土上 暗褐色土主体に少量のローム。黑色土混入。粘性。しまり弱い。
- 3:暗褐色土上 暗褐色土主体。微量のローム混入。粘性。しまり弱い。

09P 土層説明

- 1:暗褐色土上 黑色土主体。微量の暗褐色土。微量のローム混入。粘性。しまり弱い。
- 2:暗褐色土上 暗褐色土主体。微量の黑色土。ローム混入。粘性。しまり弱い。
- 3:暗褐色土上 暗褐色土主体。多量のローム、少量の黑色土混入。粘性。しまり弱い。
- 4:暗褐色土上 暗褐色土主体。微量の黑色土。ローム混入。粘性。しまり弱い。
- 5:暗褐色土上 黑色土主体。微量の暗褐色土混入。粘性。しまり弱い。

第12図 ピット構造実測図（1）



第13図 ピット構造実測図(2)



第14図 0-1H 構造実測図

第3章 まとめ

縄文時代

今回の調査においては、遺構についてはピット3基のみであるが、遺物は中期初頭～前半の土器片等がまとまって出土した。重量にして、2,267gである。内訳は、石器ではなく、土器片・土器片錐・土製円盤となっている。財團法人千葉県文化財センター調査で、隣接の北海道遺跡においても、竪穴住居跡等の遺構は検出されていない。本遺跡はまだ3地点のみの調査であり、面的にも限定された一部の情報であるが、北海道遺跡を含めた中では「定住エリア」ではなく、「採集活動の場」として機能したと現時点では考えておきたい。

弥生時代

後期土器片が3点出土したのみである。北海道遺跡においては、7haの調査区において竪穴住居跡が1軒のみ検出されている。須久茂谷津を隔てた北側対岸の権現後遺跡においては73軒検出で、立地上の特異性を示していると言える。北海道遺跡は、標高22m～10mの下総下位面から千葉段丘面に遺構が展開する。権現後遺跡は、標高約22m程度の広い下総下位段丘面に位置しており、標高の高い部分に弥生時代の遺構が占地する。以上の傾向が北海道遺跡報文中で指摘されており、そのことから、本遺跡エリアでの同時代の遺構は希薄となることが想定されよう。

古墳時代

中期竪穴建物跡2棟(01D・02D)は、土器の年代観から5世紀半ば～後半である。北海道遺跡では、調査区北側の須久茂谷津に面した標高10～13mの千葉段丘面を中心に22軒が展開している。内12軒は石製模造品工房跡である。今回調査区はその東側に連なる部分にあたり、別群を形成するものである。

後期竪穴建物跡1棟(03D)は、口辺部が直立した壺形態、黒色処理を施した高壙、退化した有段口縁環等の要素から7世紀前半である。北海道遺跡においては、中期と同様に須久茂谷津に面した標高10～13mの千葉段丘面に7軒がⅠ～Ⅲ群を形成している。今回検出の1棟は、北海道遺跡の一番近い最北東部のⅠ群から100mの距離があり、別群と想定できる。この遺構が単独棟か複数棟により構成されているかは、今後の調査による。

奈良時代

当該期の竪穴建物跡1棟(04D)は、03D覆土中検出で壁の一部分のみの遺存であり、遺物からの情報によるとこころが大きい。出土土器の年代観から、7世紀末葉～8世紀前半の所産である。北海道遺跡では、奈良平安時代竪穴住居跡114軒、掘立柱建物跡10棟等がⅠ～Ⅲ群により形成される。竪穴住居跡の内、8世紀前半まで遡る遺構はなく、8世紀半ば以降10世紀代の時間幅で集落は展開する。萱田遺跡群全体でみても、当該期の遺構は少ない。今後の調査により、北海道遺跡の千葉段丘面での奈良平安時代集落の形成が、南海道遺跡にどう展開するか判明していくことになる。

参考文献

- 1984 (財)千葉県文化財センター「八千代市権現後遺跡－萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅰ－」
- 1985 (財)千葉県文化財センター「八千代市北海道遺跡－萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅱ－」
- 2012 八千代市教育委員会「千葉県八千代市 市内遺跡発掘調査報告書平成23年度」
- 2013 八千代市教育委員会「千葉県八千代市 市内遺跡発掘調査報告書平成24年度」

図版1 遺構 [遺跡全景・01D～03D]



01D遺物出土状況（南から）



01D全景（南から）



02D遺物出土状況（西から）



02D全景（西から）



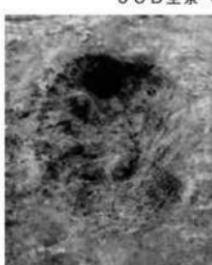
03D遺物出土状況（西から）



03D全景（南から）



遺跡全景（北から）



02D炉跡

図版2 遺構 [ピット]・遺物 [01D・02D]



01P 遺物出土状況



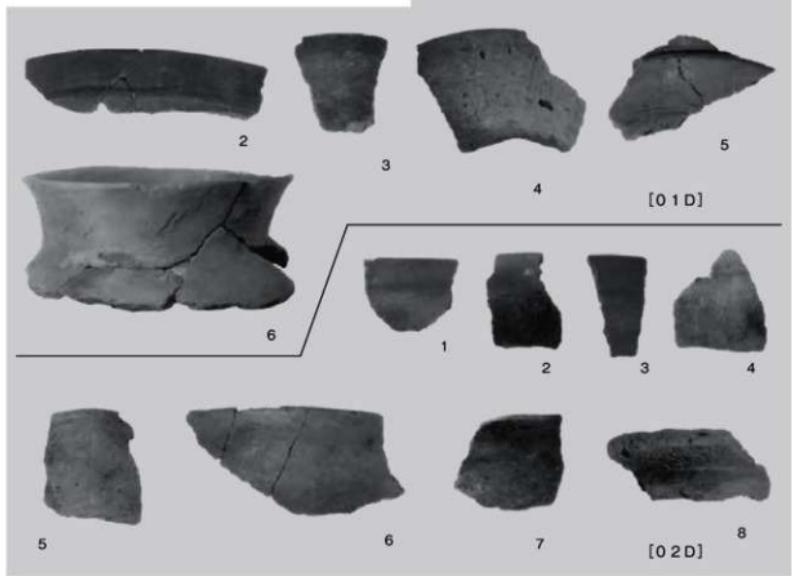
02P 全景



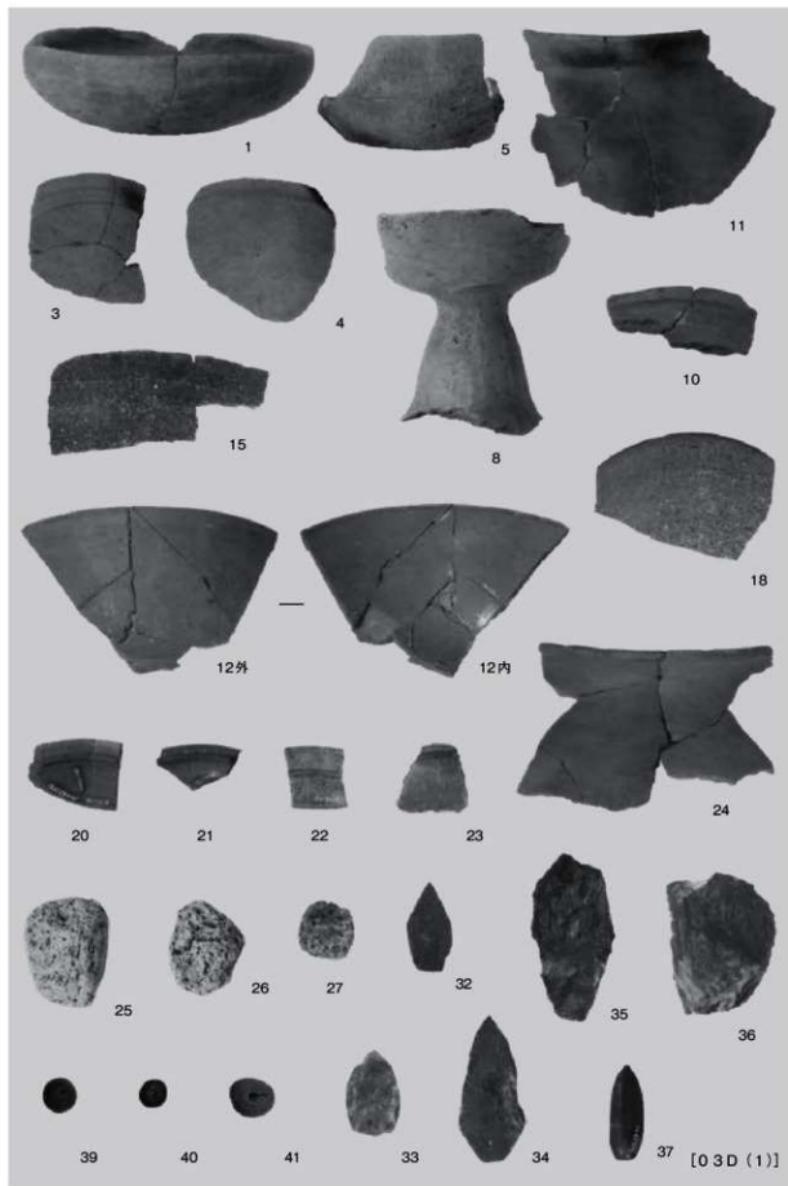
14P 全景



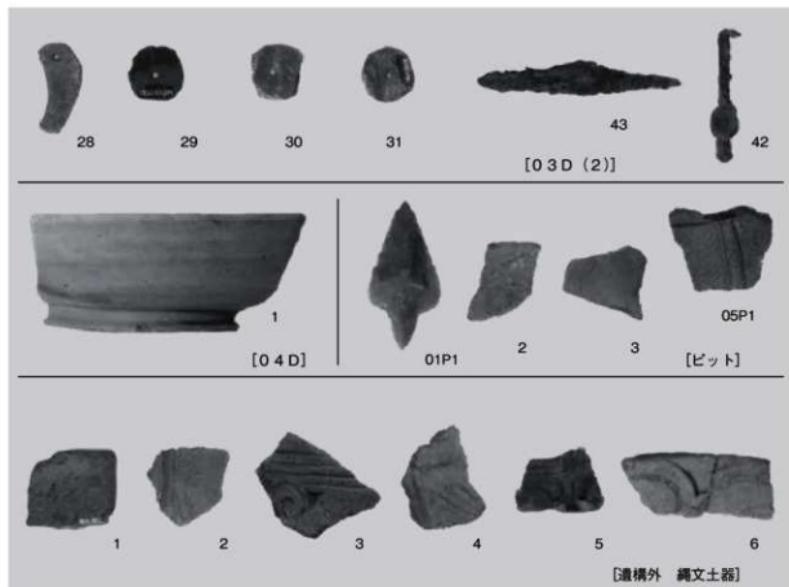
1



図版3 遺物 [03D(1)]



図版4 遺物 [03D(2)・04D・ピット・遺構外縄文土器]



報告書抄録

ふりがな	ちばけんやちよし なんかいどういせきしきーちでん						
書名	千葉県八千代市南海道遺跡c 地点						
副書名	宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
編著者名	森 龍哉						
編集機関	八千代市教育委員会						
所在地	〒276-0045 千葉県八千代市大和田138番地2 TEL 047 (483) 1151代表						
発行年月日	平成31年3月25日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 東経	調査期間	調査面積m ²	調査原因	
南海道遺跡c 地点	かわだあざにしほり 萱田字西堀747番1	12221 182	35度 44分 7秒	140度 6分 31秒	20180724 ~ 20180830	上層308.5	宅地造成

所取遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
南海道遺跡c 地点	包蔵地	縄文時代:古墳時代 奈良平安時代	古墳時代堅穴建物跡3棟 奈良時代堅穴建物跡1棟 同時ピット12基・掘立柱建物跡1棟 奈良平安時代土師器・須恵器	縄文土器（前中期） 古墳時代土師器・石製模造品 同時ピット12基・掘立柱建物跡1棟 奈良平安時代土師器・須恵器	
要 葉			調査において、堅穴建物跡4棟が検出された。内訳は古墳時代中期2棟・後期1棟・奈良時代1棟である。本遺跡での調査は3地点目となるが、本格的調査は今回初めてである。隣接の北海道遺跡と同様の構造構成であり、弥生時代後期土器片も3片出土している。特筆すべきは、縄文中期初頭～前半の土器等がまとまって出土しており、低台地上での土地利用について、今後の参考となる。		

千葉県八千代市
南海道遺跡 c 地点
— 宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

発行日 平成 31 年 3 月 25 日

編集 八千代市教育委員会 教育総務課
〒 276-0045 八千代市大和田 138-2
TEL 047-483-1151 (代表)

発行 関口 幸男
印刷 金子印刷企画
